

伊藤伸一 Ito Shinji

知っていますか？

一問一答

どもり
と向きあう



解放出版社



どもり と向きあう

知っていますか？

一問一答

伊藤伸一

Ito Shinji

解放出版社

●はじめに

どもる人の苦しみは、古い文献にも出できます。古くは、宗教指導者モーゼと、紀元前三〇〇年代に荒波に向かい、口の中に小石を入れて発声訓練をして雄弁家になつたギリシャのデモステネスが特に有名です。「どもりさえ治れば何でもできる」とどもる人が考えることを、デモステネス・コンプレックスというほどです。どもる人の悩みは、人類の歴史と共にあつたといえます。

古くからある問題でありながら、現代医学や科学、アメリカを中心に発展した言語病理学の膨大な研究によつても、原因やその特質の解明はできていません。また、「根本的な治療法」がないまま、どもることを治すさまざまな「治療法」が提案されました。ところがそのほとんどが効果はなく、どもる人の悩みは解決されていません。治すことを目的としたこれまでの取り組みでは、解決できないのは明らかです。新しい発想で、展望を切り開く必要があるという点では、極めて新しい問題だといえます。

世間にはさまざまな民間療法があり、どもりも例外ではありません。一時消えたかにみえた「どもりは必ず治る」と宣伝する民間の吃音矯正所きうおんが最近息を吹き返し、インターネット上では根拠のない情報や「治療法」があふれています。また、研究者・臨床家など専門家の間にも考え方の違いはあります。どもりほど、とらえ方や取り組み方が違い、情報が乱れているものも珍しいでしょう。

どもりに関する情報の提供や「治療」は、これまで、研究者・臨床家からなされできました。どもる人は常に受ける立場でした。この提供者と利用者の関係を、メーカーの論理、ユーザーの論理としてとらえ直してみることにします。

「どもりを治し、改善を目指すのは、善であり、正しい。何よりも、どもる人自身が望んでいる。その方法を追求し、提供するのが我々の使命だ」

これはまさにメーカーの論理です。薬や手術がない中では、メーカーが提供する方法は、どもる人本人や周りの人の努力が必要なものばかりです。そして、多くの人が努力をしても、満足のいく結果が得られませんでした。現在、アメリカで議論が続いている、「どもらずに流暢りゅうちょうに話す」方法も、「流暢にどもる」方法も、どもる人ができなかつたがための、研究者・臨床家による議論でしょう。

「治す側は、とつかえひつかえ方法を提案しても傷つかないが、使う側はそれに振り回され、人生に大きな影響を受ける。治ると信じて努力をしても、効果がないと、どもりも自分も否定してしまう。どもりの改善が、自分らしく豊かに生きる唯一の解決の道だと信じてきたが、別の道もあるのではないか」

こう考えて、別の道を探るのがユーザーの論理です。一人ではメーカーの製品の欠陥に気づけません。消費者運動のように、セルフヘルプグループに大勢の当事者が集まり、体験や情報が集まると、治つていないう事実が明らかになります。また、どもりが日常生活にどう影響するかは、当事者が一番知っています。どもりながら、日常生活に対処する知恵も私たち当事者が蓄積してきました。

どもりに対する取り組みに、豊富な学問的知識や、デモステネスのような難行苦行の特別な努力が必要なら、多くの人ができないでしょう。だれでもが取り組め、自分の幸せに結びつくものを見るのが、ユーザーの論理です。

この本は、どもりを、ユーザーの論理、つまり「治療」を受けてきた消費者としての当事者の側からとらえ直します。

- 問 1 どもつて何ですか。
- 問 2 どもつは差別語ではなこのですか。
- 問 3 どんな時に呟くのですか。
- 問 4 どもつの原因って何ですか。
- 問 5 これまでのよつた「治療」がなされてきましたか。
- 問 6 吃る人の歎みとせじのよつたものですか。
- 問 7 アメリカの専門家は吃音の問題をどうやってこまかか。
- 問 8 どもつは障害ですか。

資料 ● 小説に見る吃音の苦悩

30

問 9 なぜ、「えもりを治す」ではなく、「つまぐわ」なのですか?.....

問 10 子どものどもりは、放っておいたらほどんどが治るので心配ありませんと言われましたが、本当ですか?

問 11 「子供の吃音は環境調整が治療だ」といわれてくるのですが、母親の育て方が悪いのでしょうか?

問 12 幼児の吃音にこいつて大切なことは何ですか?.....

問 13 もうすぐ小学校入学です。この教室が小学校にあるそ�ですが、どんなといひですか?

問 14 吃る子供のねむたんへ

62

問 15 学童期の問題は何ですか?.....

問 16 学童期の子どもの教育目標は何ですか?.....

問 17 えもり回しあいふくらべ

76

吃音を受け入れることが大切だと言われましたが、「吃つてもいい」なんてとても子どもに言えませんが.....。

問 17 「どもつこひしてホーフンに『話す』とは、どのよのな」とですか?

88

問 18 治りなつまでも楽に吃る」ことを指導できるか?

91

問 19 吃音の言語訓練はどのよのなものですか?

95

問 20 吃音に悩んでいる私にとって、吃音とつき合つのは、 実際はとても難しいことだと思つのですが.....。

98

問 21 子どもが将来どのような職業に就けるか心配です。 吃る人はどんな職業に就いていますか? 就いたういですか?

102

問 22 「どもつば必ず治る」と宣伝しているところがありますが.....。

106

体験 デモツを治したいと思い続けた日々

110

問 23 吃音とつき合つては何が必要ですか?

113

問 24 ヒジキの教室の教師、言語聴覚士など臨床家の役割は何ですか?

118

6

吃る人の悩みとはどのようなものですか？

「だれでもが言えるようなこと、言わなければならないこと、言えて当然のこととが言えない苦しみだ」と、私は、吃る人の悩みを説明します。

小さな子どもでも言える自分の名前や、「おはようございます」などのあいさつ、出席点呼の「はい」などが言えない時があります。友人のセールスマンが、流暢に商品説明をした後、名前を聞かれ「……」と、立ち往生し、相手のびつくりした態度に、恥ずかしさと屈辱感を味わったと言います。会社の名前が言えないうことだけで、会社を辞めた人もいます。私は、自動券売機がなかつたころ、吃音矯正所の最寄り駅「高田馬場」が言えず、駅員から叱られたり、後ろから罵声ばせい

を浴びせられました。切符を買うだけでこんな苦労をしなければならないのかと、吃音を恨みました。電話でも途中で切られたり、いたずら電話と間違えられました。セルフヘルプグループの集まりで、笑い話のように話されるこれらのことも、その時は苦しくつらいことでした。特定の「音」が言えず、それが自分の名前や会社の名前や駅名だとこのようなことが起こります。この言えない特定の音や、吃る度合い、吃る場面は、人それぞれ違います。

また、吃音に対する考え方や悩みの深さも人によって違います。かなり吃つても、あまり悩まない人がいたり、周りが気づかない程度なのに、深刻に悩み、学校や社会に出て行けない人がいます。吃音状態の程度では、吃る人の悩みの大きさが測れないのが吃音の特徴です。

周りの人の態度も違います。平気で吃る人に多く出会う人は、吃音に悩む人を見ると、「そんなに悩むなんて」と精神的な弱さを指摘します。吃る人の苦悩ばかりを聞く研究者や臨床家は、「何とか吃音を治してあげたい」と考えます。吃音が治った人を知っている人は、「努力すれば治るはず」と思います。この、周りの人の対応の違いや、社会一般の「どもりは治る」との誤解も吃る人を苦しめます。

せます。

私は教師の対応によつて、「吃る人間は劣つている、恥ずかしい存在だ」と強くマイナスに意識しました。そして、吃ることへの不安が高まり、話す場面にて行けなくなりました。話す場面を逃げることでますます話せなくなりました。

周りからの、また自らが貼はつた、「どもりは悪いもの、劣つたもの、恥ずかしいもの」という烙印らくいん（ステイグマ）と、「吃つてはいけない、どもりは治さねばならない」という呪縛じゆばくによつてますます悩みが深まるのです。そのステイグマをはぎ取り、呪縛から解放されるまで、吃音に悩む人は苦しむのです。

吃音を隠し、話すことから逃げていると、本来しなければならないことがおろそかになり、自分がしたいことをしないで、あきらめてしまします。ある人は、「吃ることそのことよりも、どもりを言い訳にして、意に反した行為をしてきたことに思い悩んできたのかもしれない」と振り返っています。

また、吃つたり吃らなかつたりするので、どの自分が本当の自分なのか受け入れられずに悩みます。私は吃つている今は仮の人生で、吃音が治つてからの人生が本当の人生だと思い、今を大切に真剣に生きることができませんでした。

問

6

.....吃る人の脳みのいのうなものですか？



資料●小説に見る吃音の苦惱

同僚たちは、折にふれて、雑談を交わす。だが、ぼくは少しでも、その中に加われないのだ。じつさう、ぼくは滅多に口を利かない。利かないのではなく、利けなこのである。とじって、むりで、ぼくは監おもではない。吃りだが、口を利くといひでは利くのである。ときには、雄弁にならいたずらである。だが、なぜか、研究室のあの空氣に入ると、ぼくは口が利けなくなってしまつ。まるで、声帯が閉まつてしまつたのよつだ。奇妙なことだが、じつさういふのである。

ぼくは、思つことを語つとねりこ、やがて語すことなどができない。気軽に物を語つとねりこ、やがて語すことなどができない。心理的にやうできないところのではなく、肉体的にできなるのである。話すといつゝときは、ぼくには、非常に上ネルギーを要するといひなのだ。普通においては、思つ」といふ語や」といはせ」といふコールであり、直線的に結ばれてゐる。思つことが、何の抵抗も障碍もなく、上ネルギーも要せず、水の流れのように、じく自然に口から滑り出

る。だが、ぼくにおいては、思つ」といふ語すことのあるだには、高い山があるのだ。その高い山を越え、言葉となって口から出るに要するだけのエネルギーを持たない思念は、遂に思念に終わって、ぼくの口から発せられるに至る。ぼくが发声するためには、肉体上のエネルギーを要するのみではない。同時に、精神的・心理的エネルギーをも必要とする。少なくとも、あの研究室のような空氣の中にあるもの、やつである。その发声の山を越え、夥しい量のエネルギーを費やして物を語ることになり、精神的にも肉体的にも非常に疲れ込むことになり、したがつて、それは、ぼくには大儀至極なことである。だから、ぼくは、本当に必要な場合にだけ、本当に必要なことをつけるのみである。だが、それすら満足にこころることは滅多にない。必要なときに必要なじじがいえないところといひ、じつてみればそれが吃音者の吃音者たる所以なのである。(『凍える口—金鶴泳作品集』)

クレイン、一九〇〇四年。一九六六年作)